下総地域における龍神信仰

A Primitive Form of the Faith in Ryuzin in Simofusa Area

井　上　孝　夫

Takao INOUE

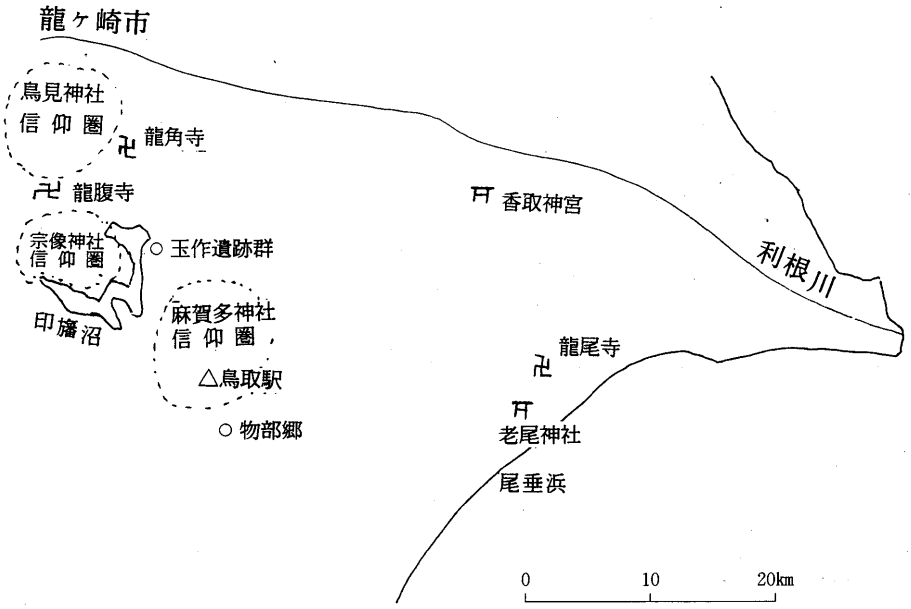
[目次]

第１節　はじめに
第２節　龍尾寺で聞き取り
第３節　龍角寺の龍女伝説
第４節　龍腹寺の龍神伝説
第５節　三寺院と龍神伝説のかかわり
第６節　物部氏と龍神信仰の原初形態
第７節　結語
＜文献＞

第１節　はじめに

千葉県の北部，旧下総国の領域に龍神信仰にまつわる三つの寺院がある（この三つの寺院の位置関係については，[図１]，を参照)。それは龍角寺（栄町・旧安食村)，龍腹寺（本埜村)，龍尾寺（八日市場市）であり，これらの寺院にまつわって残された伝説はおよそ次のようなものである。

「人間と仲のよい龍神（印旛沼の主）が人間の姿で村に遊びに来ていた。日照りの年，龍は恩返しに雨を降らせた。しかしその龍は大龍王に雨を降らせた罪でからだを断ち切られ，天から投げ捨てられた。頭，胴体，尻尾の三つに裂かれた龍は安食，本埜，八日市場で見つけられ，村人は龍角寺，龍腹寺，龍尾寺を建立して，供養した」（高橋・荒川編，1976，32-33頁)。



[図１]　下総龍神伝説関連概略図

この伝説では龍は天界で降雨をつかさどる神である。その龍が日照りに困った人間の要求を聞いて雨を降らせたことによって，大龍王の怒りを買い，三つに裂かれ天から降って来た，というのは何ともダイナミックな話である。これを通常の雨乞い信仰とみることもできるだろう。しかし龍角，龍腹，龍尾という三カ寺のあいだには何らかのつながりがあるのではないかと考えることができ，これらの寺院を手がかりに地域の基層文化に迫ることもできるのではないかと考えられる。そこで本稿では，この三つの寺院にまつわる龍神信仰を手がかりにして，下総地域の基層文化に接近してみることにしたい。

まず龍神信仰にかかわる寺院の来歴を簡単にみておくことにしよう。

［1］龍角寺

和銅２年（709年）開創。銅像薬師如来は白鳳仏。法起寺様式の壮大な寺院であった。印旛国造の信仰があったか，と考えられる。

［2］龍腹寺

大同２年（807年）開創。龍神伝説は延喜17年（917年）の話だという。仁王像，梵鐘あり。

［3］龍尾寺

斉明７年（661年）開創。和銅２年に旱魃があり，龍神伝説がつくられる。大同２年に空海が来山している。

このように各寺院の創建年代は龍神伝説と直接結びついているわけではなく，７世紀から９世紀にかけてまちまちである。また龍神伝説そのものをみても，寺院によって時期に隔たりがある。そこで各寺院の来歴について，現地調査で得られた資料などをもとに検討してみよう。

第２節　龍尾寺での聞き取り

まず八日市場市大寺の龍尾寺を訪ねた。寺には本堂のほかに，観音を祀る旧護摩堂と薬師堂があり，その奥に弘法大師お手掘りの井戸というものが残されていた。これは大同２年に掘られたもので，洗眼にも使えるとわざわざ断り書きがしてある。また境内には応安６年（1373年）建立の板碑が残されている。

住職に龍神伝説を調べている旨を伝え，まず寺の来歴について尋ねてみた。

「龍尾寺の所在地の地名『大寺』はかつて官寺［天皇の命によって建立された寺］があったことを示している。それなりに古い寺だと思われる。

現在寺に伝わる縁起は明暦年間（1655-58年）に書き直されたものである。その要約を印刷物にしておいた。」

弘法大師ゆかりの井戸というのが「大同２年」に掘られ，しかも洗眼に使えるとの記載（眼は天目一箇神につうじる）が製鉄や採鉱にかかわるのではないか，と思ったので，この近くで砂鉄の採取をしていたという伝承の有無を尋ねた。すると住職からは「この近くでは私が子供のころ，小山を崩してなくしてしまうほど砂鉄を採掘していた」という答えが返って来た。この話からして，この付近では砂鉄の採取はかなり日常的に行われていたのではないかと思われる。そして弘法大師，「大同２年」，「洗眼」といった伝承はやはり砂鉄採取などの金属信仰にかかわるものなのではないか，という確証を得た。この点についてはまたのちほど検討したい。

ところで，龍尾寺を実際に訪ねてみて，龍が天に昇った場所は尾垂村だったという伝承があることがわかった。そのことは住職作成の「略縁起」（1984年刊行）におよそ次のように記されている。

「・・・和銅２年［709年］，元明天皇の御代に全国的な大旱魃に襲われて飢餓に苦しむものその数限りなし，このことを痛く心配された天皇は勅使に命じて釈命上人を導師として請雨法を修法して雨乞いをなされた。その折に，惣領村の浜より龍神が空に向かって舞い昇った。その時，龍の尾の垂れ下がったところから，尾垂惣領村となり，のちに尾垂村となった。現在の匝瑳郡光町尾垂がそれである。

空中高く昇った龍神は，まもなくすさまじい雷鳴とともに，そのからだが三つに切断されて堕ち，同時に激しい雨が降り出して，七日七夜のあいだ降りつづいたという。それによって枯死寸前の生物はみなことごとく蘇生したと伝記されている。

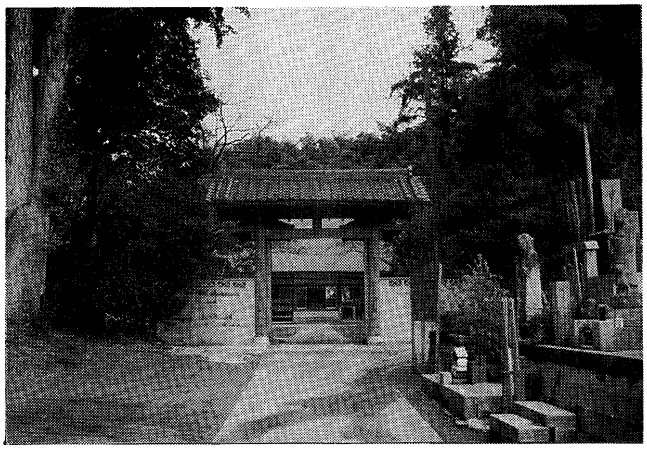
三つに断たれた龍神の頭は下総国埴生庄に，腹は下総国印西庄に，尾は北條庄大寺郷にそれぞれ堕ちて祀られた。すなわち頭は印旛郡栄町龍角寺に，腹は印旛郡印西町龍腹寺に，尾は大寺の寺に祀り，勅使釈命上人名付けて『天竺山尊蓮院龍尾寺』となる。以来関東三龍の寺と呼ばれるに至った。

それ以来遠近より参詣者多く，七堂完備せる名刹なり。また天暦年間（945-956年）のうちに，正月より6月まで雨降らず，大日照りがあった。その時，村上天皇は醍醐の観賢僧正の孫弟子である観宿僧都と申す法師に，勅使として当寺において請雨法を修すれば，即日に雨の降ること一天四海に広大なり。ここをもって，観宿僧都をすなわち雨僧正と号するに至るなり。

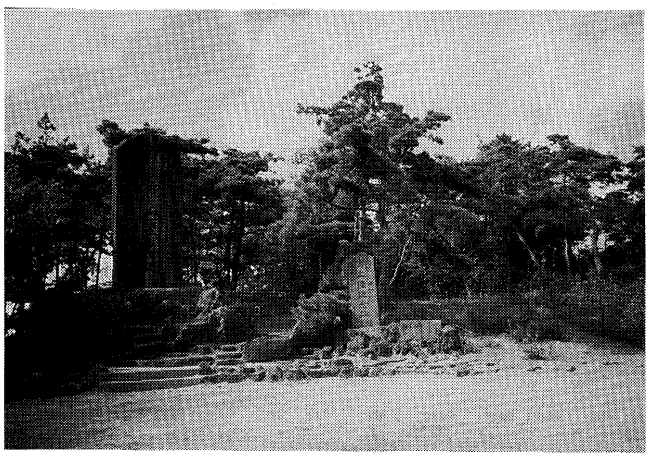
かくして幾度もの雨乞いを成就して来れども，応安3年（1370年）南北朝時代に火災に遭い，堂塔ことごとく消失せり。その後に建立されたる堂宇が現在残っているものである。」（引用にあたっては字句を若干改めた。また文中の「印旛郡印西町龍腹寺」は正確には「印旛郡本埜村龍腹寺」である。）

この縁起は他の伝承にはない，いくつかのことを教えてくれる。

まず龍が舞い昇りその尾が垂れ下がったのが光町尾垂の浜だというのである。この尾垂という地名が歴史上その名をとどめているのは天慶年間（938-947年）に寛朝大僧正が不動明王（のちの成田山本尊）を護持して上陸した場所だということによる。そのいわくつきの場所の地名由来が龍神伝説にあるというのだが，尾垂の由来に関する説が他にない以上，この地名由来は宗教的な地名由来として大変興味深い。



龍 尾 寺



尾垂浜〔成田不動本尊の上陸地とされ，聖地とされる〕

そしてこの縁起では，龍神の話が主体にはなっていないことにも注目したい。龍神を罰する大龍王も，ましてや龍と人間の親密な交流なども一切登場しない。あくまでも宗教の観点から雨乞いの話が語られているだけである。そして文脈から判断して龍神伝説以前にこの三つの寺はすでに存在していたことがわかる。つまり龍神を祀るために新たに寺院を建立したわけではない。龍神伝説によって，すでに存在していた三つの寺が相互に結びつき，それにふさわしい寺名に改めたということである。

また境内で目に付いた応安6年の板碑は縁起と対照させていえば，南北朝期の火災による焼失から立ち直った直後に建立されたものだということがわかる。

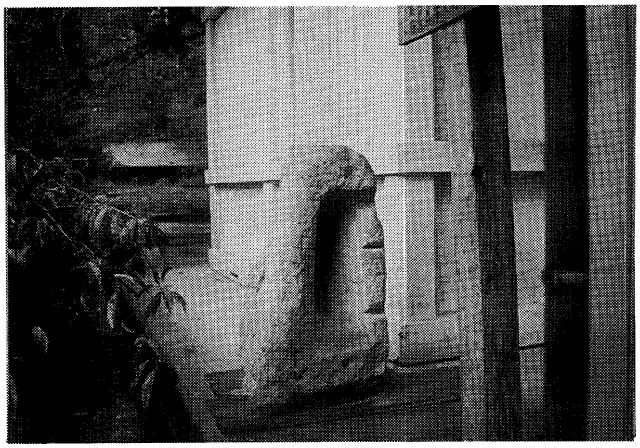
なおこの龍尾寺のある八日市場市大寺からは奈良時代の瓦が出土しており，かつてこの地に官寺があったという伝承を裏づけている（千葉県内の大寺地名にはもう一カ所，木更津市大寺があり，それは飛鳥時代創建の大寺廃寺によるものだとされている。そのほかに，成田市公津原からは「大寺」と墨書された土師器が出土している）。おそらくそれは龍尾寺の前身ともいうべき寺院だろう。

第3節　龍角寺の龍女伝説

龍角寺は千葉県内で最も古い寺院の一つで，7世紀後半の創建，本尊薬師如来は白鳳仏（銅製）という。しかしいま行ってみると，境内には往時を偲ばせる幾つかの遺物が残されてはいるものの，いささか拍子抜けするようなごく普通の寺院である。

栄町役場が設置した境内の案内板には次のようにある。

「709年に龍女化来し，一夜のうちに諸堂を建立したと伝えられる，関東で最も古い寺院の一つです。当時は東に高さ33m程の三重の塔とも五重の塔とも推考される塔がありました。本尊の薬師如来座像（国指定重要文化財）は709年につくられた本県最古の白鳳時代のものです。そのほか境内より出土した奈良時代前期の銅製経筒や布目瓦（県指定文化財）などの文化財があります。」



龍角寺の石製鴟尾

ここにあるように，龍角寺というのは龍神伝説にちなんだ寺というよりも，龍によってつくられた寺だったのである。また本尊の薬師如来も龍女が持ち来たりしものという（藤沢，1919，128頁）。このことから推察すると，龍角寺という寺名はのちの龍神伝説に基づいて改称されたのではなく，最初から龍角寺と称していたものと思われる（当初は龍閣寺と称していたともいう）。とはいえ龍神の頭がこの地に落ちたという伝説は確固としたものであるが，その年代は釈命上人が寺を再興した天平２年（731年）の翌年であり，龍尾寺の縁起の内容とは異なっている。

ところでこの龍角寺は1971年の発掘調査では法起寺様式の伽藍配置をもっていたことが確認され，蘇我氏ゆかりの大和国山田寺と同一様式の瓦が出土したことから，蘇我氏とのかかわりが指摘されている。

この寺の周辺にはまた，龍角寺古墳群と総称される古墳が点在している。そのなかでも龍角寺南東の岩屋古墳は一辺78メートルの日本最大の方墳であり，龍角寺造営年代とほぼ重なる７世紀後半に築造されたと推定されている。そしてここでも蘇我氏とのかかわりが指摘され，印旛国造の墳墓ではないかといわれている。

だがここで一つの疑問をもたざるを得ない。龍角寺と岩屋古墳とが同一の氏族とかかわるのは納得できるが，それは蘇我氏とかかわるのだろうか。そもそも印旛（印波）国造という名称は物部印葉連公に由来するのであり（「天孫本紀」），この地域には蘇我系以前に物部氏がいたのではなかったのか。

この地域にはまず物部氏がいたのである。それを明かす論拠はここに述べた物部印葉連公の存在，それにこの地域特有の鳥見神社の存在である。ここにはっきりと物部氏の足跡が刻印されている。しかし中央での政争の末，物部氏が蘇我氏に敗れたことは，この地域にも大きな影響を与えたことだろう。この地でも物部氏は没落して敗走し，蘇我氏系統の氏族が進出してきたのだろうか。もしそうだとすると，その新しい勢力とは一体だれなのか。神田まもる（1993）の次の指摘は筆者にとって大変興味深い。

「［岩屋古墳は］この地域に６世紀後半から着々と力を蓄えた豪族が７世紀中に構築したものらしい。７世紀には大和の影響を受けて仏教が当地方に浸透する。白鳳期の仏頭のある龍角寺境内からは『朝布』『服止部』などの文字瓦の出土をみている。飛躍的想像では，これら機織りで栄えた部族の大首長の墳墓ではなかろうか。」

文中の「朝布」は麻布，「服止部」は機織部つまり秦部ということだろう。もしこれらの文字がこの地域の支配者を示しているのであれば，その支配者とは秦氏をおいてほかにはない。

ではその痕跡はどこにあるのか。

一つにはこの龍角寺のある旧安食村の安食という地名である。この安食は阿自岐という蘇我氏系の渡来人の名前だったのではないだろうか。しかしそれを補強するだけの論拠はないので，ここでは一つの仮説として提示するにとどめておきたい。

もう一つは秦氏と多氏との関係である。この点について柴田弘武（1980，70頁）は次のようにいう。

「『国造本紀』によると，印波国造は神八井耳八世の孫伊都許利命ということになっておりますので，これもオオ氏同族ということになってきます。」

これは系譜論からみた場合の有力な見解であるが，多（オオ）氏というのは秦氏系であり，秦氏が聖徳太子や蘇我氏と密接なかかわりをもっていたことを考えれば，その一族が蘇我氏ゆかりの寺院を建立したということは十分に考えることができる。

ということで岩屋古墳を築造し龍角寺を建立した勢力は，物部氏の後続の秦氏系の豪族だったということになるだろう。

ところでこの龍角寺にかかわって，地元には７つの不思議な民話が残されている。それは「三がの岩屋」，「八ツの井戸」，「親は古酒，子は清水」，「坂田ケ池の片歯の梅」，「龍燈腰掛けの松」，「不増不滅の石」，「村雨返しの松」というものであるが，なかでも「三がの岩屋」の話は興味深い。これはその名のとおり，岩屋古墳にまつわる話で，この古墳には三つの洞穴があり，なかに隠れ座頭という妖怪が住んでいるというものである。この妖怪は近隣の人々に膳や椀を貸してくれるのだが，あるとき一組だけ返し忘れたところ以後貸してくれなくなったという。

この話には二つの含みがある。一つは洞穴が隠れ里を象徴しているというもの。椀貸しはその隠れ里と俗世間とのあいだの交流を示しているというのである。もう一つは椀を貸すというところから木地師の存在を示しているというものである。

この点について，神田（1993）は次のように指摘している。

「洞穴などの主は，全国に日用の木製品を作って渡り歩いた木地師の存在も考えられるという。彼らは，洞穴などの中からこれらを持ち出し，貸し出すことによってありがたさを強調したのであろう。」

この伝承は椀貸し伝説として定型化されたものであり，利根川流域では上流の吹割の滝，榛名町下室田・長井寺の井戸などにも伝えられているという。

しかし疑問なのは，膳や椀というものはわざわざ借りなければならないほど貴重なものだったのか，ということである。それに木地師というのは山深い里に住んでいるというのならわかるのだが，なぜ平野部の印旛郡の地にこのような伝説が残っているのだろうか。この点について，「椀貸し伝説」という時の「椀」の意味にこだわって考えてみると，この椀というのは砂金の採取に使われていたのではないか，という仮説をつくることができる。例えば，宮城県牡鹿半島の「鮎川鉱山砂金採り体験場」のパンフレットをみてみよう。ここは伊達政宗が金を採掘した場所だということだが，現在砂金採りが体験できるようになっている。そのパンフレットのフレーズが「ほら，きらきら・・・おわんの底にひかってる」というもので，ここでは入場料を払い，椀を借りて川に流れている砂金をすくうのである。砂金と砂鉄とでは砂金の方が比重が大きいので，水流を使って砂金だけを選鉱することができる。これと同じようなことが印旛郡でも行なわれていたのではないだろうか。砂金採りは慣習的な砂金採取権をもっていて，通常は村人とのあいだに交流はない。しかし例外的に，椀を借りることができれば村人も砂金採りに参加することができる。「椀貸し」とはその例外を象徴的に語っているものではないのか。村人は椀を借りることによって砂金採取のおこぼれにあずかっていた。ところがある時，その椀を返さなかったがために以後は締め出しを食うことになった。「椀貸し伝説」にはいろいろな枝葉がついているのだが，「椀貸し」の本質は砂金採取にあるのではないか，と思われるのである。なお，なぜ印旛郡で砂金なのか，という疑問があるだろう。筆者はこの近辺に金の鉱脈があったなどと考えているのではない。非常に素朴な砂金採取がこの利根川流域にもあったのではないか，と考えているのである。佐倉，佐原といった「佐」のつく地名はその昔砂金を採っていた場所だ，という指摘はこの点で興味深いものがある。

このように考えると，「椀貸し伝説」は先住採鉱民族と後続の開拓農民との接点を語り伝えるものとして読むことができ，この地域における民族の重層性を示唆するものとなっている。

第４節　龍腹寺と龍神伝説

この龍角寺から南西に10キロほど行ったところに龍腹寺がある。この寺も往時を偲ばせるような雰囲気にはなく，無住の寂しい寺院である。ただ隣接して地蔵堂があり，こちらの方が風格がある。この龍腹寺についてここでは，『新版千葉県の歴史散歩』（1989年，115-116頁）の次のような説明を手がかりにしたい。

「龍腹寺（天台宗）は，807（大同２）年の創建で，元の寺名は延命寺あるいは龍福寺といわれている。今の寺名になったのは，龍角寺・龍尾寺とともに龍神伝説に由来する。917（延喜17）年，下総地方がかんばつに見舞われて人々が困っていたときに，印旛沼の主であった龍が現われ，人々を救うために命をかけて天に昇った。するとたち

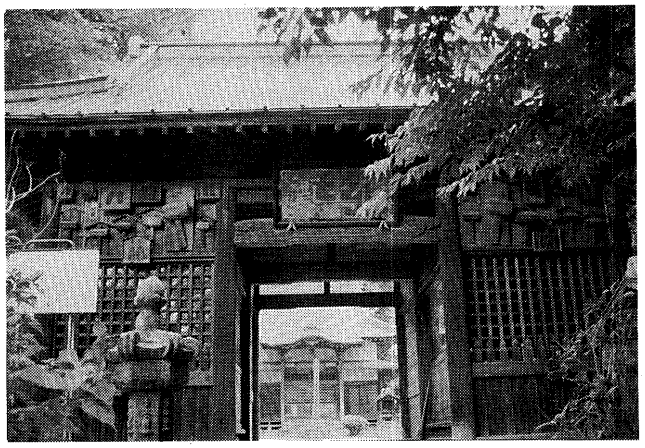
まち黒雲がわきおこり，待望の雨が降って大地がよみがえった。人々は歓喜したが，龍は雷鳴とともに体が頭・腹・尾の三つに裂けて天から落ちた。そこで人々は，龍が落ちたそれぞれの地に弔って冥福を祈ったという。

仁王門の仁王像は，一夜でつくられたので乳がなく，俗に乳なし仁王と呼ばれている。この仁王門には，木槌をつけた絵馬が奉納されているが，これは耳の不自由な人が聞こえるようになりたいと祈願したものである。仁王門の右手にある鐘楼の梵鐘（県有形）は，南北朝時代のものといわれている。」

龍腹寺もまた龍神伝説によってつくられた寺ではなく，もともとあった寺を龍神伝説にちなんで改名したものである。「玄林山勝光院龍腹寺略縁起」によると，大同2年に慈観上人が建立した時点では勝光寺延命院といい，延喜17年（917年）に天龍山龍腹寺になったという。また伝説の龍神はここでは印旛沼の主ということになっている。ということは龍神が天へ舞い昇る場所も当然印旛沼からということになるだろう。そうだとすると，尾垂の浜から舞い昇ったという龍尾寺の縁起とは食い違うことになる。また龍が天に昇って雨を降らせた年代にもずれが生じている。ここに引用されている龍神伝説は全体としてみると宗教的色彩の抜けた，民衆の側からの伝説という性格をもつように思われる。

後段の仁王門は正確には地蔵堂の仁王門である（写真参照）。この仁王像については現地，龍腹寺区の人々によって次のような由緒（1977年3月27日付）が記されている。少し長くなるが，ここに引用しておきたい。

「当仁王尊は大同2年（約1200年前）当区の伝記によれば，左は慈覚大師，右は丹慶の作也と之有，一夜に建立せし故に無乳なりと。無乳仁王尊としてその名高く乳に関する願いは速やかに成就すと謂う。永正5年国司千葉北條両氏の戦に廃燼と帰し，後50有余年天文19年千葉氏により再興したるも，後文政元年7月寺僧の不戒火に依り再焼せり，領主稲葉公が再建せしも，又火災に逢い諸堂と共に焼失せり。後当村土井伊作発願主となり近郷より浄財をつのり，大佛師高野光慶，杉山宣慶兄弟により嘉永5年6月彫刻を始め，同6年5月完成せるもの也。其後120有余年歳月の流れと共に損傷甚しく，昭和40年代に到りては損傷見るに耐へず，部落民の総意によりこの郷土の誇りである仁王尊を修復し，祖先の偉業を讃え更に後世に乳無仁王尊の御尊像を末永く伝え受，ここに茨城県江戸崎村佛師富岡清吾義範父子（屋号樽見屋）に依頼し，昭和49年12月14日より同52年3月20日に到る間，富岡父子の綿密なる解体，修理本堅地漆仕上げの卓越せる技能の結果立派に修復奉る。」



龍腹寺地蔵堂の山門

この仁王尊に関する伝承では特に慈覚大師が登場するところが興味深い。もちろんこれは史実ではない。その意味するところは仏教による東国の教化にかかわっているはずである。

第5節　三寺院と龍神伝説のかかわり

以上の検討からまずわかるのは龍神伝説の成立以前からこの三寺院は存在していたということである。

龍角寺はその成立が8世紀初頭というが，白鳳仏の本尊などから考えてそれはほぼ信頼できる伝承である。

また龍腹寺の9世紀初頭成立伝承も疑う根拠は希薄である。ただし大同2年成立伝承というのは製鉄信仰とのかかわりで類型化できるものであり，その背景には忌部氏系統の修験道勢力とのかかわりも示唆されているところであり，それらの点からの検討の余地が残されている。また仁王門の仁王尊の一体が慈覚大師の作という伝承も天台系修験道とのかかわりを示唆するものとして注目される。

問題が残るのは龍尾寺の伝承である。龍尾寺が7世紀半ばの成立というのは信用できるのだろうか。龍尾寺の成立以前にこの寺の隣接地に大寺があったことは発掘調査ですでに確認されている。その大寺の成立年代は発掘された瓦から判断して奈良時代ということであるから，龍尾寺がそれをさかのぼる成立をもつとは考えられない。龍尾寺はあくまでも大寺が廃寺になってのちに建立された寺院だろう。そうだとすれば，7世紀半ばに建立され

たのは大寺の方だったのではないだろうか。この龍尾寺の成立年代と併せて疑問になるのは龍神伝説の成立年代である。龍尾寺の縁起では龍角寺の創建年代に合わせるかのように龍神伝説がつくられている。これは辻褄が合い過ぎているのではないか。おそらくこの年代設定は，龍尾寺が龍角寺よりも古い創建年代をもつことを主張しているのだろう。そこに龍尾寺縁起の作為的な性格をみて取ることができるのである。

龍神信仰は龍角寺の伝承に原初的にみられる。龍神は印旛沼の主なのであった。そしてそれは先住民族の信仰とかかわっている。つまり龍角寺が蘇我氏（秦－多氏）系統の信仰だとすると，龍神信仰は彼ら以前の民族，すなわち物部氏系統の信仰だったのではないか。そこで次に，民族の重層性という観点からこの地域における龍神信仰を整理してみることにしよう。

第6節　物部氏と龍神信仰の原初形態

すでに述べたように，そもそも印旛という地名は物部印葉連公に由来する。またこの地域における特異な存在とされる鳥見神社，その主祭神・饒速日命は物部氏の祖神である。また大和における物部の先住者であり，物部と姻戚関係を結ぶ登美長髄彦の「登美」（トミ）も「長」（ナガ）も，ともに蛇神のことであり［富来，1970］，蛇への信仰はそのまま龍神信仰につながっていく。以上のことから考えて，印旛沼の主とされる龍神はこの物部氏によってもたらされたものではないか，とみるのが妥当である。

しかしいくつかの疑問も残る。まず物部氏の本拠地と考えられるのは現在の四街道市物井，山梨のあたりであり，そこは印旛沼からは幾分隔たったていることである。また鳥見の地名は『常陸国風土記』に初見であるが，鳥見神社の創建年代については曖昧である。鳥見は本当に物部氏と結びつくのか，という疑問が残る。さらに，印旛沼周辺と八日市場・龍尾寺の龍神信仰がどのようにして結びついたのかという点に関してもよくわからない。

これらの疑問を解き明かすためには，まず印旛沼周辺の神社や古墳の来歴を検討してみる必要がある。そのうえで，下総地域における物部氏の足跡を洗い直してみなければならない。

［1］印旛沼周辺の神社と古墳

印旛沼周辺の神社は北から鳥見，宗像，麻賀多というように，比較的明瞭に信仰圏が分かれている（［図1］）。

このうち鳥見神社は各神社に神楽が伝承されていることで有名だが，ここでの関心事は物部氏の祖神・饒速日命が祭られていることである。しかし今日の文献の多くは『常陸国風土記』の鳥見の丘が印旛村萩原の鳥見神社で，『和名抄』の印旛郡印西庄に「登美」地名が記載されていることを伝えるのみで，この神社の創建についてはあまり言及されることがない。そこで改めて『千葉県印旛郡誌』（1913年）記載の鳥見神社3社についての記述を手がかりにしてみると，

木下町小林・・・永禄11年（1568年）に再建，
六合村萩原・・・勧請年不明，大和国城上群鳥見神社より分霊勧請，
永治村浦部・・・慶安元年（1648年）鎮座，

とあって，肝心の萩原の鳥見神社の創建年代がわからない。しかし周辺の鳥見神社が近世の創建ということを考えると，萩原の鳥見神社の創建年代を古代に求めることには慎重にならざるを得ない。

次に宗像神社についてだが，その中心を占めると思われる印旛村船尾字本郷の宗像神社は社伝によれば，日本武尊が東征の折，この地に兵をとどめ，スサノオを祭ったといい，のち筑前の大友式部がこの地を領有して本国から宗像神社を勧請したという。またそれとは別に，中世の臼井興胤が足利尊氏に従って九州筑前で功をあげ，それにちなんで宗像神社を祀ったともいう。結局，宗像神社の創建年代ははっきりとしないが，この神社は果たして宗像三神ゆかりの海人族と直接結びつくものなのかという疑問が残る。

最後の麻賀多神社は古代印波国造との関係で重要である。その発祥は成田市船形区手黒を奥宮とし，のちそこから1キロほど南の台方区稷山に創建されたものであり，神社の案内にはおよそ次のような由来が記されている。

日本武尊が東征の折，この地域は五穀の実りが悪いのを知り，里人を集めて大木の裏に鏡を懸け，その根元に7

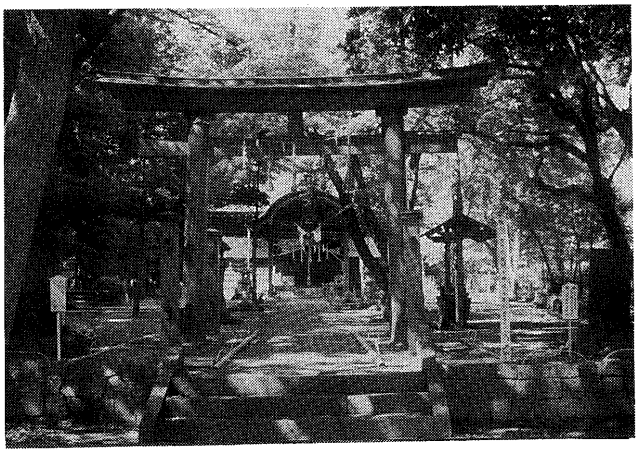
つの玉を埋めて伊勢神宮に祈願したところ，豊年がつづいた。

3世紀（応神20年），伊都許利命が鏡を霊代として祭った。稚日霊より夢の中で洞木の下の地中に玉（勾玉）を掘り出して，和久産巣日神を祭れとのお告げがあり，玉を掘り出して御鏡と共に霊代として併せて祀り，麻賀多の大神として崇め奉った（つまり，和久産巣日神が麻賀多の大神である）。そして八代，神津の2領を神領とした。

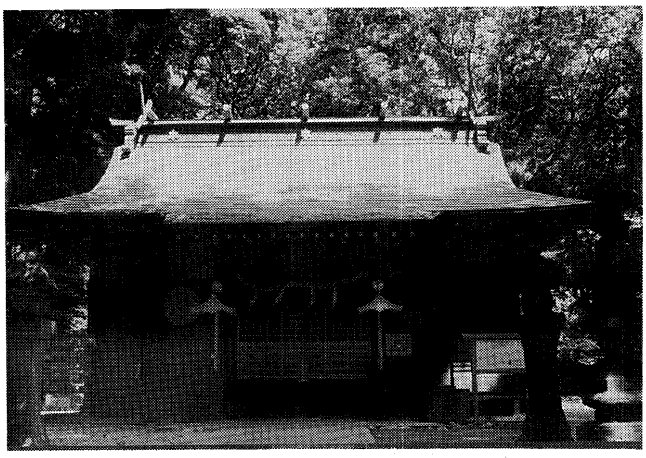
推古16年（608年），この地に宮居を建てた。それが麻賀多の大宮（台方区稷山の麻賀多神社）である。

およそ以上のような由緒であるが，文中の伊都許利命は神八井耳8世の孫で，印旛国造とされる人物で，奥宮に隣接してその墓と伝承されている古墳（東西35メートル，南北36メートルの方墳）がある。神八井耳は『日本書紀』では神武天皇の子供で多（オオ）臣の祖とされている。また推古朝に寺院を建立したのは伊都許利8世広鋤手黒彦である。

では印波国造の出自は物部氏と結びつくのだろうか。

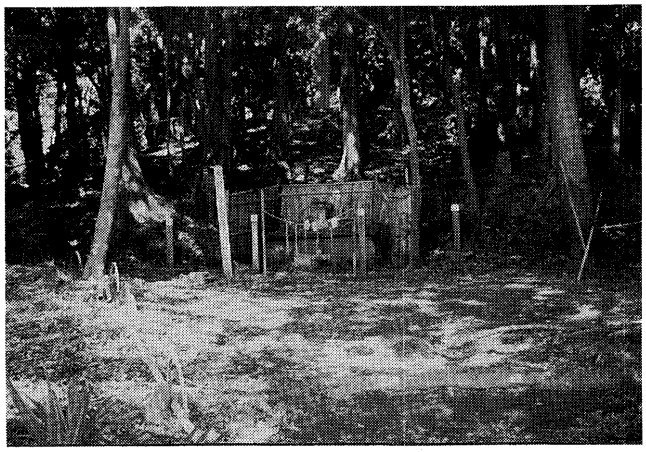


麻賀多神社奥社〔成田市船形〕



麻賀多神社〔成田市台方〕

すでに触れたように，柴田（1980, 70-71頁）は「国造本紀」における印波国造が神八耳の系譜を引いている旨の記述に基づいて，印波国造は多（オオ）氏の系統であることを指摘している。そしてそのうえで大和岩雄の説を引きながら，麻賀多は馬来田，望陀と同一名称だということを指摘し，「房総の長狭，印波，馬来田の三国造ともオオ氏の一族でしめられた」と述べる（長狭国造の祖も神八井耳である）。



船形古墳〔伊都許利命の墓と伝承されている〕

ここでオオと物部との関係はどのようなものなのか。柴田はこの点について直接言及はしていないが，久慈国造とのかかわりにおいて「当初物部系が侵略したのちオオ氏がさらに進出してきたことも考えられ」（柴田，1980, 92頁）として，物部を先住者と位置づけているかにみえる。しかし印波国造においては両者の関係は明確ではない。

そこで印旛沼周辺の古墳を手がかりにして，この問題を考えてみよう。宮原武夫（1982, 76頁）は印旛沼周辺の公津古墳群のうち，瓢塚，天王塚，船塚，また龍角寺古墳群のうち浅間山，岩屋をいずれも印波国造の墓と位置づけ，「古墳の形から見て古い順に並べると瓢塚→天王塚→浅間山→船塚→岩屋となり，印波国造の地位が印旛沼周辺の豪族の間で交互に継承され，いまだ世襲になっていなかったことが推定できる」としている。この指摘は正当なものだろう。これらの古墳のうち伊都許利の墓と伝承されているのが船塚古墳であり，もし船塚古墳の被葬者をオオ氏系とみるのならば，岩屋古墳の被葬者もオオ氏系ということになるだろう。そうだとすると物部氏はどこへ行ったのか。

[2] 物部氏の足跡

印旛沼周辺の古墳は系譜論でみる限り，オオ氏の可能性が高い。しかしオオ氏以前に物部氏の存在があったことも無視することはできない。その物部の足跡について，ここでは伊都許利，麻賀多，印旛の名称の由来を検討するなかで解明していこう。

まず印波国造とされる伊都許利命についてだが，この「伊都」は北部九州の伊都国につうじるものだろう。『筑前国風土記逸文』「怡土郡」の項では伊都（怡土）県主は高句麗の意呂山に天下った日矛の末裔であり，『日本書紀』「仲哀紀」では「伊蘇」が訛って「伊都」になったとある。この伊蘇について，鈴木武樹（1976, 28頁）は「伊蘇（上古音）の『蘇』は『金』の意味で，斯廬（沙羅）の『斯』（沙）に通じるという考え方もある」としている。また「許利」は石凝命のコリと同じで「鋳造する」の意味だろう。そうだとすれば，伊都許利とは「金属を鋳造する」ということになる。伊都許利8世が広鋤手黒彦という金属系の名称であることを併せて考えれば，この一族は高句麗から九州を経てこの地に渡来した海洋系の製鉄民族である。

次に，麻賀多神社の麻賀多の名称由来についてだが，麻賀多だけを考えれば，それは勾玉の短縮形か，マを接頭語とする「潟」の意味にとるのが妥当なところである。しかし大和岩雄や柴田弘武のいうように，麻賀多，馬来田，望陀が同一の名称だとすると，そこに共通する観念をみないわけにはいかない。それは一体何か。麻賀多の由来に関する最も説得力ある説明はすでに，竹内健（1976, 73頁）によって次のように行なわれている。

「・・・彼等自身は自らの族をば『マラ』と称したが，倭人は古くに強いラ音には不得意であったがために，『マラ』音は後にはかなり複雑に分岐した。則ち『マカラ』『マカダ』『マカ』『マクダ』『マロ』『マリ』『マリコ』『マツラ』等である。・・・とも角，この祖をたずねれば物部に至る筈である。」

ここで主題になっているのは天津麻羅を始祖とする麻羅族のことであり，彼らは物部氏の系譜につながる海洋系渡来人にほかならない。麻賀多，馬来田，望陀には天津麻羅の名称が込められているというわけである。

最後に印旛という地名については通常，その語源は「稲庭」にあるとされることが多いが，竹内健（1976, 89頁）は溶鉱神としての風神を斎き祀る風族をシナといい，そのシナがイナやヒナなどに転訛したとしている。そのうえで，竹内は次のように述べている。

「下総の印旛（いなば）は，山陰道の因幡（いなば）と同じく『夷処』の意であっても『稲庭』の意では決してないのである。この社［麻賀多神社のこと ――引用者］の伝に『印旛国造伊都許利命，鏡を霊代として祀る』とあるが，この神名は明らかに石凝（いしこり）命の謂であろう。勿論ここでいう国造は，律令国造ではなく，三世紀の頃この印旛沼一帯を領していた夷系の豪族を指す。上総国の望陀（もうだ）郡も安房国の朝夷郡も同系であり，更に上総の海上（あま）郡・埴生（はにう）郡・夷灘（いじむ）郡と並べると，千葉県は麻羅族系地名のオンパレードである」（竹内，1976, 97頁）。

確かに風への信仰は製鉄と結びついている。そしてシナがヒナに転訛することもあるだろう。しかしシナ・バが印旛になる，というよりは「イナ」「イネ」は稲ではなくて砂鉄を意味するととった方よい。また伊都許利が石凝と同一というのはいい過ぎで，先に述べたような意味にとりたい。とはいえ，房総地域が物部系の製鉄民族と深くかかわるという指摘は重要なものである。

なお印旛と同一の地名と位置づけられる因幡は饒速日を始祖とする伊福部氏のゆかりの地でもあり，イナバ，インバが物部系とかかわることがここでも示唆されている。

以上の検討結果から弥生時代末期から古墳時代にかけて，印旛沼周辺をはじめとする房総の各地域は物部系の製鉄民族が開発をすすめたことが確認できる。彼らは鳥や蛇への信仰をもっており，印旛沼の主とされる龍神への信仰も基本的には彼らのもたらしたものといってよいだろう。しかし古墳時代の後期，この地域にはオオ氏ないし秦氏系の侵略がすすむ。彼らは先住民の鉄を奪うとともに，仏教の力によって先住民を教化する。龍角寺の薬師如来像は仏教によって東国を教化するための御本尊にほかならない。

こうして仏教勢力に押されるかたちで物部氏の姿はやがてみえにくいものとなっていく。しかし彼らの足跡は完全に抹殺されたというわけではない。彼らの存在は麻賀多，印旛のような地名に残るとともに，伊都許利命は麻賀多神社奥宮に祀られた。そして蛇神への信仰は龍神への信仰へと発展していくことになる。

［3］匝瑳物部氏と龍神信仰

ということで龍神信仰は多ー秦氏系の民族によって継承，発展していくことになる。改めて考えてみれば，龍角寺の龍角という名称は龍の頭部を意味するというよりは，文字どおり龍の角を指しているのではないだろうか。つまり龍というのは角という武器をもっていることになる。そのこととのかかわりで興味深いのは，『常陸国風土記』に角をもった蛇（夜刀神）が登場することである。大方の論者はこれを中国の武神・蚩尤と解釈している。この蚩尤は砂や鉄を食べる鉄神でもあり，渡来人秦氏のなかにも受け継がれた。従って『常陸国風土記』にいう夜刀神は秦氏系統の製鉄民を指すものとみてよいだろう。しかしこの夜刀神も後続によって討たれてしまう。おそらく房総においても多ー秦系に次いで中央から進出してくる勢力があった。その一団が香取神宮の経津主を奉斎する物部氏であった。この物部は『古語拾遺』において「内物部」とも呼ばれる王権に服属した物部氏であり，石上神宮に本拠をもつ武装集団であった。そして彼らは朝廷の奥州侵略のために香取，鹿島神宮を先進基地とした。その物部一族の一人である物部小言は東北侵略の功績によって，匝瑳郡の建設を許されている（『続日本後紀』「承和2年（835年）3月条」）。またそれと前後して，この匝瑳物部氏は弘仁・承和年間に三代にわたって陸奥国鎮守府将軍となっている。現在の八日市場市・老尾（生尾）神社は社伝によれば，祭神は経津主の子・朝彦となっているが，この朝彦とは物部小言の別名であるという（菱沼・梅田，1975）。

老尾（生尾）神社

このように物部氏は朝廷の奥州侵略政策において再び房総の歴史のなかに登場する。そしてこの匝瑳物部氏の存在は物部氏と匝瑳・香取・印旛という龍神信仰の道筋を暗示しているのではないだろうか。つまり原初物部（麻羅族）の蛇神信仰は，多・秦系を経て内物部（石上氏）によって一つの完成をみたのである。

第7節　結論

下総地域の龍神伝説は，房総の伝説のなかでは比較的よく知られているものの一つである。しかし龍尾寺での聞き取りで，龍が天に舞い上がった場所が匝瑳郡光町にあり，尾垂浜と名づけられていたということを知って，改めてこの伝説のもつ奥深さを感じた。というのも尾垂浜の由来はほとんどの文献に取り上げられていないからである。それが切っ掛けとなって龍神伝説の関連場所を地形図上に落としてみると，あたかも千葉県北部に龍の姿が浮かび上がるかのようであった。そして龍の尻尾のその先に尾垂浜があるように，龍の頭の先には龍ケ崎（茨城県）が存在することに気づいたのである。今回の調査では残念ながら，龍ヶ崎の地名由来が龍神伝説にあるという手がかりは得られなかったが，九十九里浜から印旛沼を経て龍ヶ崎へと至る道筋に龍神信仰ははっきりと刻印されているように思われる。

問題はこの龍神信仰を持ち歩いた主体である。もちろんそれは目にみえるかたちでは密教系の仏教宗派であり，また法華経信仰を広めるための手段だったと位置づけることもできる。その場合，竜神信仰はあくまでも龍が水にかかわるところに由来する雨乞い信仰として把握される。

しかしそれは表面的なことであり，深層には別の信仰がある。それは龍神の原型ともいうべき蛇神への信仰であり，それは単に水への信仰にとどまることなく，金属への信仰とかかわる。ここではその原初の担い手を鳥見，印旛，麻賀多などの由来を解き明かすことによって，物部氏に求めた。そしてそのうえに，多ー秦氏系の仏教化された龍神信仰への転換をみた。しかしこの問題は現実にはそう簡単ではない。物部系と多ー秦系をどのように位置づけるのかという問題は象徴的にいえば，谷川健一『白鳥伝説』と柴田弘武『東国の古代』とをいかにして総合的な見地から再構成していくのか，という問題である。本稿ではそれに対する一つの答えを出した。しかし現実にはより複雑な問題が絡み合ってくる。例えば東国を意味する「あづま」の語源となった安曇氏とのかかわりの

問題，あるいは天太玉命を始祖とする忌部氏の位置づけの問題，あるいは中臣・藤原氏の位置づけの問題である。これらの問題の解明は今後の課題として残されたといわなければならない。

ここでの主張は龍神信仰のもともとの姿は蛇神信仰であり，それは系譜論を別にしていえば，海洋系製鉄民族とかかわるというものである。従ってその基層文化として，雨乞いに対しては鉄を，麻布に対しては砂鉄を，機織りに対しては製鉄業をみなければならない。仏教による地域支配はこの後者の側面をいわば闇の世界に封じることによって成立したといえるだろう。しかしそれは完全に消え去ったわけではなく，語りごとのなかに隠され，あるいは地名や神名のなかにいまなおその痕跡をとどめているのである。

＜文献＞

千葉県印旛郡役所，1913＝1985，『千葉県印旛郡誌』臨川書店。
千葉県高等学校教育研究会歴史部会，1989，『新版千葉県の歴史散歩』山川出版。
藤沢衛彦，1919，『日本伝説叢書　下総の巻』日本伝説叢書刊行会。
菱沼勇・梅田義彦，1975，『房総の古社』有峰書店。
神田まもる，1993，「水神伝説と岩屋古墳」『千都よみうり』344号。
宮原武夫，1982，「印波国造」，千葉日報社編『千葉大百科事典』千葉日報社。
柴田弘武，1980，『東国の古代』崙書房。
鈴木武樹，1976，『消された「帰化人」たち』講談社。
高橋在久・荒川法勝編，1976，『房総の伝説』角川書店。
竹内健，1976，『邪神記』現代思潮社。
谷川健一，1986，『白鳥伝説』集英社。
富来隆，1970，『卑弥呼』学生社。